

The Reclusive Images in Natsume Sōseki's Novel I Am a Cat

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齊, 金英 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1528

夏目漱石『吾輩は猫である』における「逸民」表象

齊 金 英

1. はじめに

夏目漱石『吾輩は猫である』（1905年1月-1906年8月『ホトトギス』に連載）が読者に提示しているのは、非凡な猫である「吾輩」が面白おかしく語り描く「太平の逸民」の世界である。この作品は日露戦争の真っ最中、激戦で多くの将兵が命を落としているという情報に接していた読者に提供され、ひと時の「太平」な時空に読者を誘い、愛読され、長期連載された。作品の凡そ半分が日露戦争中に発表された。まさに血腥い殺戮の隣で都々逸を踊る効果を持つ小説である。では、殺伐とした戦争と昂揚する戦時ナショナリズムとかけ離れた、呑気で滑稽な、「太平の逸民」の会合は、なぜそこまで読者を引きつけたのであろうか。この問題を追究するために、この作品の「逸民」について検証することが重要である。

「逸民」について、例えば苦沙弥をはじめとした「太平の逸民」の「非社会性」や、社会にとっての「無用者」である故の「正当性」——「無用であることによって撃てる時代の病弊」——¹⁾が指摘されている。社会的、時代的な視野で作品をとらえる場合、金田を代表とする実業者集団が「時代の有用者であったにも拘らず、彼等の性格の中には人間を、社会を日本を、ひいては人類・世界を不幸に陥し入れる要素が存在する」²⁾ように、利欲に群がる「有用者」よりも利欲に無頓着な「無用者」のほうが、かえって弱肉強食の帝国主義「時代の病弊」を突いていると言えよう。一方、「作者漱石の実生活上の苦しみ」や日常が、いかに「江戸戯作的天下の逸民グループという設定による笑いのユートピア空間へと転化されているか」³⁾も注目されてきたが、作者の実生活と物語をつなげることで、作品に対する読解の視野を狭めるきらいがある。また、「実業家」である「金田君や鼻子のことを語り手が『逸民』と評する可能性を、われわれは捨てることが出来ない」、苦沙弥たちと日露戦争との関係を考慮すると、彼らを称する「『太平の逸民』という語にはいま少しの留保が要求される」という指摘もある⁴⁾が、金田家の人物を「逸民」として語る可能性の提起は、やや「逸民」概念を取り違えているきらいがある。これは、「逸民」という言葉の内実についての精緻な検証が欠けていることを物語っている。また、時代背景から浮き上がって来る「国民」と「逸民」との緊張関係に配慮が欠けていることも意味している。

「逸民」とは、いったい何を指し、そこにどんな意味合いが込められているのか。東アジアのディスカールにおける伝統的な「逸民」たるものは何か。これらの問題について、「逸民」の語源である中国の「逸民」概念をいまひとつたどって考察する必要がある。中国は数千年の歴史の中で、さまざまな「逸民」を輩出してきた。そして「逸民」の多くが世の中の政局の混乱と戦争と密接な関係がある。「逸民」概念の時空を超える普遍性とそれぞれの時代的な特異性に配慮しつつ多角的な分析をしたうえで、『吾輩は猫である』の「逸民」たちを読解する場合、さらに立体的な「逸民」像が、日露戦争を背景とする日本社会の中で浮か

び上がって来るだろう。従って、本稿では猫である「吾輩」の語りを追いながら、日露戦争時の「逸民」を追究する。同時に、動物としての猫の引き裂かれる身体と精神の狭間から浮かび上がって来る「吾輩」の「逸民」性についても考察する。

2. 「逸民」とは

中国の隠遁者の最初の列伝は『後漢書』に収められた「逸民列伝」⁵⁾である。この「逸民列伝」によると、「逸民」とは「我が道を守りとおすためには宮仕えを拒否する人物」や、「官界、政治社会から逸脱した人々」であり、「自分の主義主張を貫くために」、「主君に仕えない」で、「政治社会から逸脱」していく知識人である⁶⁾。中国古来の隠遁思想の背景に政治的抑圧や政局の不安定及び戦乱があり、生命の危険を感じ、あるいは自己の倫理的な節操を守り抜くために本来仕官できる知識階級が仕官から身を退き、山野や田園で質素または貧乏な生活に甘んじることを志す。また、「仕官を望みながら、自分の主義主張をおすために仕官から遠ざかる」「逸民」は、「はじめから仕官を拒否する『隠者』」⁷⁾と区別される場合もある。つまり、「逸民」とは、明君のもとでの仕官なら望むが、政治的な暗黒時代では、節操、保身や消極的な政治的抵抗のために、政治社会の中心から物理的にまたは精神的に離れていく知識エリート階層のことを指している。このような意味で、「隠者」に比して「逸民」のほうがより一層政治に対する関心が強いと言える。「逸民」になること自体が消極的な社会批判として受け止めることができる。従って、「逸民」はより濃厚な社会性を示している。ただ、「隠者」と「逸民」は重なる部分が多く、同じ意味で解釈されている場合がほとんどである故、本稿では特にこの二つを厳密に区別しない。なお、「逸民」の形態も、山野に隠遁する、仕官せずに市井に隠遁する、仕官しながら政治社会的働きを極力減らして暮らすなどの様々なケースがある。

中国の数千年の歴史の中で、「隠者」/「逸民」が輩出した。古く伝説の「三皇五帝」の時代の歴史に名を記されているのが許由である。漢代の司馬遷（BC145-BC86）の『史記』にも、戦国時代の莊子（BC369?-BC286?）の『莊子』にも登場する「元祖隠者」許由は、優れた才智を持つ故、三皇の一人である堯に後継者として選ばれるも、それを拒否し、その招きのことばも忌み嫌って「潁水の流れて耳を洗った」という⁸⁾。また、後世の「逸民」の思想的拠になった「老莊思想」を代表する莊子は役人を辞めたあと、宰相招聘の誘いにも応じなかった。彼は「無為自然」と「内面的な絶対自由の世界」を追求し、草履売りの「路地裏の隠者」として「逸民」の思想的な真髓を後世に残した⁹⁾。

この「無為自然」と「内面的な絶対自由」の思想が一世を風靡したのが、漢の統一王朝体制が崩れ、複数の王朝が割拠し、戦乱が続いた魏晋南北朝の時代であった。中国歴史上の「逸民」の典型である「竹林の七賢」¹⁰⁾も、田園の詩人陶淵明（365-427）もこの時代を生きろをむすんでじんきょうにありきた。「結廬在人境、而無車馬喧。問君何能爾？心遠地自偏」という詩句が示しているように、陶淵明は官職を辞めた後も、「人境」で暮らしていた。彼は心という内面世界が政治社会から自由になることを目指した。一方、阮籍（210-263）をはじめとする「竹林の七賢」の多くは仕官しながら、政治社会的活動を最小限までに排除して、

権力者に左右されない内面の自由奔放さを保っていた。『吾輩は猫である』で苦沙弥の家が「太平の逸民」が会合する「臥龍窟」（『漱石全集』第I巻、157頁¹¹⁾）だと、猫に称されている。「臥龍」と称された有名な「逸民」は三国鼎立時代の諸葛亮（181-234）である。臥龍岡に隠遁していた諸葛亮は義理堅い劉備（161-223）の三顧の礼に応じて彼の軍師として活躍した。才智の優れた「逸民」は不義を働く権力者から遠ざかろうとするが、明君にであえばやはり仕える。

総じて言うと、「逸民」の特徴はいくつかある。まず、「逸民」は教養と才智があるが、現実には不満を持ち、政治社会から遠ざかろうとするエリート階層である。次に、一切仕官しないにせよ、官職から離れて隠遁するにせよ、仕官しても権力者のために働かないことを貫くにせよ、隠遁をやめて明君に仕えるにせよ、彼らは独自の主義主張や独特の倫理道徳観を持っている。さらに、彼らは決して現実世界の権力に媚びたり利欲に動かされたりしないことである。『吾輩は猫である』では、中学教師の苦沙弥をはじめ、「臥龍窟」に集まってくる美術家の迷亭や理学士の寒月、それから俳劇者の東風や哲学者の独仙などは、このような特徴を帯びている。それゆえ、猫は彼らを「太平の逸民」と称している。

3. 日露戦争と「逸民」

3.1. 緊迫した年末年始と「逸民」

要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は糸瓜の如く風に吹かれて超然と澄し切つて居る様なものゝ、其実は矢張り娑婆気もあり慾気もある。競争の念、勝たう勝たうの心は彼等が日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一步進めば彼等が平常罵倒して居る俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りである。只其言語動作が普通の半可通の如く、文切り形の厭味を帯びてないのは聊かの取り得でもあらう。（81-82頁）

これは年始に「臥龍窟」（珍野苦沙弥家）に集まってきて、競って「去年の暮」の「不思議な経験」（67頁）を披露した三人に対する猫の批評である。その「不思議な経験」が、迷亭の虚実定かではない体験談から始まる。それは彼が12月27日に母親から送られてきた便りで、小学校時代の友人が日露戦争で戦死戦傷したりしていることを知らされた時の体験である。「御前なんぞは実に仕合せ者だ」、「若い人達が大変な辛苦をして御国の為めに働らいて居るのに」、「気楽に遊んで居る」（68頁）と便りで母親にいわれ、迷亭は厭世的な気分になり、「首懸の松」（69頁）をみて自殺衝動に駆られたという。寒月も同時同刻に自分の身に起きた、同じ死の衝動に駆られる「経験」を語る。そして、苦沙弥も、矢張り暮れの12月20日頃に、「細君」の観劇に同行することを決めた時に自分の身体に起きた奇妙な不調の話の披露し、「負けぬ気になつて愚にもつかぬ駄弁を弄すれば何の所得があるだらう」と、猫に「軽蔑」（81頁）される。

日露戦場における絶体絶命の悲惨な戦死が横たわる傍らで、虚実定かではない、荒唐無稽

な死の衝動と身体や精神の異変が対置され、一見面面白おかしく、読む人の笑いを誘う。1904年の暮れと1905年の年始は日露戦争の戦場では激しい戦闘が続いていた。暮れの12月末は旅順攻囲戦が緊迫した状態で、犠牲者が大量に出ていた。例えば、12月27日の『東京朝日新聞』「陸の誉、海の勲」では、旅順攻囲戦の「名誉戦死者」が紹介されている。また、年始の1月2日に旅順陥落の号外が朝日新聞などで出されている。この年末と年始は国中が日露戦争の話題で持ち切りだったはずである。このような緊迫した状態の中で、戦争に昂揚している世の中と全くかけ離れた、奇妙な体験を語っている三人はいかにも読者の目に異様に映っていたはずである。中学教師に近視の美学者と徴兵免除が適用される大学院の理学士の三人は、それぞれ徴兵から免れる立場にいる。彼等は緊迫した戦争の現実から目を逸らすことを許された銃後の「太平」の「逸民」である。

同時に、猫は厳しい目で彼等を観察している。「競争の念」と「慾気」を持つ彼等が「俗骨共と一つ穴の動物」だと断定されることから免れたのは、「其言語動作」に「文切り形の厭味」がないからだ。つまり、彼等の「競争の念」も、「慾気」も、競って「不思議な体験」を披露することに止まり、世間一般の利害損得から出発した通人ぶることと違い、利欲重視の世俗的な観点から見ると、全く無意味なものである。

世間一般の思考回路がここで脱臼され、解体されていると言える。ここ「臥龍窟」では、当時の日本社会全体を包み込んでいた日露戦争の緊迫した空気が、のらくら話により醸し出される弛緩した「太平」の空気取って代わられている。しかし、だからといって、彼等は全く政治社会に無関心とは言えず、むしろそれぞれ強い関心を持っている。実際、苦沙弥は「戦争の通信」(49頁)を熱心に読んでおり、迷亭も身近な人達の戦死に衝撃を受けている。寒月も「旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ」(28頁)、と言って苦沙弥を散歩に誘い出しているくらいである。しかし、一方で、そのような日露戦争と関連する緊迫した血腥い現実が、彼等の会話や思考にさほどのほらず、のぼるとしても、茶化されて笑いの種と化してしまう。現実社会の中にいながら、現実社会を遠ざけている点から言うと、彼等は「逸民」に値する、と猫は認定している。

3.2. 苦沙弥の日記と日露戦争

猫が身近で観察できる苦沙弥の場合、日露戦争の現実から遠ざかろうとする様子が顕著に現れている。これは彼の日記から窺える。例えば、苦沙弥の12月1日と12月4日の日記を猫が覗き見し、その内容が読者に伝えられる。いずれも最近はまりだした水彩画についての愚痴と夢の話になっている。だが、ここでわざわざ断っている12月1日と12月4日という二つの日時は、いずれも日露戦争と深い関係を覗かせている。1日の『東京朝日新聞』では、「旅順公報 203 高地激戦中 敵壘占領」の号外が出されている。4日も激しい戦闘の様子や死傷者の情報が『東京朝日新聞』や、珍野家が講読していると思われる『読売新聞』の紙面に溢れている。戦時通信を熱心に読んでいたら、苦沙弥はこの緊迫した戦況を知らないはずがない。しかし、それを知りながら、一番私的な思考領域である日記からその現実世界の一大関心事が完全に排除されている。

極めつけは1月2日に旅順陥落の知らせを持ち込んできた寒月と共に散歩に出かけたこ

とを日記に記しているくだりである。旅順陥落で「市中は大変な景気」なのに、寒月と共に町に出かけた苦沙弥の次の日に記した日記にこの「景気」が全く言及されていない。芸者の品評や自己の胃病ばかり気にしているその内容は、「旅順の陥落より女連」(28頁)に興味があるという猫の見方を傍証しているようである。ここまで来ると、猫も「人間の心理程解し難いものはない」(32頁)と嘆く。そして、「世の中へ交りたいのだから、くだらぬ事に肝癢を起こして居るのか、物外に超然として居るのだから、薩張り見当が付かぬ」(32頁)ようになる。いかにも「裏表のある」(32頁)、「虚栄心に富んで居る」(34頁)人間として、苦沙弥が猫の眼に映ってしまう。「裏表」と「虚栄心」があるにも関わらず、「物外に超然として居る」という矛盾をはらんだ苦沙弥の複雑な思考回路は、日本社会にしながら、その現実社会を〈超脱〉し、〈自由〉に飄逸としたいという彼の願望を物語っている。

3.3. 「不相変」の「太平の逸民の会合」

『吾輩は猫である』は全部で11章からできている。その中の第1章から第5章は日露戦争中の1905年1月1日から1905年7月1日までに発表されている。第1章が執筆されたのは1904年の12月あたりである。日露戦争の緊迫した膠着状態が、第1章と第2章で語られている年末年始に「臥龍窟」で繰り広げられる弛緩した「逸民」談義と鮮明な対照をなしている様子は前述したとおりである。旅順陥落後も、日露戦争が続く中、「逸民」たちの会合も相変わらず続く。

第3章では、苦沙弥が早世した親友「天然居士」のために「墓銘を撰して居る」(91頁)ところ、迷亭が飄然と現れる。そこへ寒月もやって来て、「首縊りの力学と云う脱俗超凡な演題」の「演舌の御浚ひを始める」(99頁)。二三日後にまたやって来た迷亭が、「旅順陥落の号外を知らせに来た程の勢」で越智東風のドイツ語がうまく出来ず狼狽した「高輪事件」(104頁)を吹聴する。そこへ金持ちを驕っている金田夫人の「鼻子」(107頁)が娘婿の候補として寒月を探りにやって来る。「鼻子」の後について金田家を探索した猫が戻って来たとき、寒月も加わり「鼻」談義に花を咲かせていた。年末年始と何も変わらず、日露戦争何のそのという「太平の逸民の会合」が「不相変」(131頁)開かれていた。日露戦場の血腥い殺戮の緊迫感は一掃され、読者はしばし癒しの「太平」の世界へと誘われる。そもそも、『吾輩は猫である』は徹底した戦争への〈無関心〉を貫くことで、かえって広く読者を魅了している。そのことは、読者にも戦況下で張り詰めた神経を癒す笑いが必要であったことを物語っているだろう。「逸民」だけではなく、多くの「国民」も「太平」を望んでいた証でもある。

第4章では、昔の学友であり、今は実業界入りの鈴木藤十郎が金田夫婦に頼まれて、寒月が博士号を取るように働きかけて欲しいと苦沙弥に注文してくる。しかし、そこへ、まともな迷亭がやって来て、「鼻」論を展開し、「利口者」(179頁)の藤十郎を狼狽させる。第5章では、猫の目撃した泥棒「陰士」(194頁)や猫のねずみ取りの話が展開された。

総じて言うと、珍野苦沙弥家、つまり「臥龍窟」に集まってくる「太平の逸民」たちは、日露戦争中であるにもかかわらず、戦争という重大な社会的関心事を〈無化〉した会話空間をつくり出している。国家の未来にかかわる政治的な事件に〈無関心〉という意味で、彼等

は均一的な近代国民国家の「国民意識」で統合されていく「国民」から逸脱した内面的な自由をもつ「民」的な存在である。では、日露戦争というコンテキストから彼等を抜き出して見た場合、まだ「逸民」と言えるだろうか。日常の利害損得に執着している金田家や車屋の夫婦も日露戦争への関心を見せていない。しかし、猫は彼等のことを「逸民」と見なしていない。世俗的な利欲と弱者に対する容赦ない攻撃に齟齬する人間は決して「逸民」とは言えないからである。日露戦争後に発表された『吾輩は猫である』の後半も検討しながら、苦沙弥たちの「逸民」性の普遍性を多角的に検討する必要がある。

4. 「逸民」というスタンス

4.1. 「偏屈」・「天然」

『吾輩は猫である』では、猫の「吾輩」がその主人の苦沙弥に対して容赦ない辛口批評をしている。「彼は性の悪い牡蠣の如く書齋に吸ひ付いて」、「達観した様な面構をして居る」(24頁)、「人間も此位偏屈になれば申し分はない」(25頁)、「我儘で偏狭な」(81頁)「自分の無智に心付かんで高慢な顔をする教師」(23頁)、などなど。「無智」で「我儘」、ひきこもりに「偏狭」と、何と気難しい人だろう。前述した日露戦争の緊迫した戦状と相容れない日記や、迷亭らと競って年末の「不思議な経験」を語るなど、苦沙弥の種々の奇抜な言動はこの偏屈な性格の所以であると、読者もついつい納得してしまう。さらに、「大町桂月は主人をつらまへて未だ稚気を免かれずと云ふて居る」(340頁)と猫はいう。実際、大町桂月は『太陽』に寄せた評論の中で、苦沙弥から漱石本人を推量して、漱石は神経質で趣味が狭い、「詩趣ある代りに、釋氣あるを免れず」と批評している¹²⁾。これを漱石がさらに作品の中で猫に語らせる。作品に対する批評をさらに作品の中で皮肉するという現実と虚構を織り交ぜた構造になっている。これは、苦沙弥と漱石本人を同一視する安易さに対する〈反論〉でもある。同時に、猫の語りもテキストの中で相対的にとらえる必要があるという注意喚起でもあると思われる。

実際、テキストは苦沙弥の違う一面も物語っている。そもそも捨て猫の「吾輩」を憐れみ、家に止ませたのはほかでもなく苦沙弥である。雑煮の餅に齒がはまり、「吾輩」が「眼を白黒」させているとき、「餅をとつて遣れ」(39頁)と、救ってくれたのも苦沙弥であった。日ごろ、「吾輩」はやはりこの命の恩人の膝の上や背中に乗って寛いでいる。ここに、苦沙弥の「偏屈」だけではない情け深い一面がある。これだけではなく、苦沙弥は時々なき親友の「天然居士」を偲び、「墓銘」(92頁)まで考案している。また、「鼻子」が苦沙弥に寒月のことを根掘り葉掘りと探り、極めつけは隣近所の人達も動員して珍野家を「探偵」(122頁)させた。その無法ぶりに憤り、金田令嬢との結婚は「断念になつた方が安全」(138頁)だと迷亭が主張する。「あんなもの、娘を誰が貰うものか。寒月君もらつちゃいかんよ」(138頁)と苦沙弥も迷亭に賛同した。しかし、後日、金田家の依頼を受けた鈴木藤十郎に、「当人同士が嫌やでないなら中へ立つて纏めるのも、決して悪い事はない」(164頁)といわれ、苦沙弥は「当人同士」という言葉に心が動かされる。実業家は嫌いでも、「娘には恩も恨みもなく、寒月は自分が実の弟よりも愛して居る門下生である。もし鈴木君の云

ふ如く、当人同士が好いた仲なら、間接にも之を妨害するのは君子の為すべき所作でない」(165頁)と思ったからである。苦沙弥の「偏屈」な外面の裏で、世俗的な利欲に動じない、人にも、動物にも、憐れみ深い優しい心が見え隠れしている。

もちろん、「女はどうせ嫁でなし」(553頁)という16世紀の「ダマス、ナツシ」論を展開する苦沙弥には「偏狭」と「無智」な側面がある。しかし、他方で、珍野家は案外男女平等の先端を走っているとも言える。苦沙弥と細君との関係性からその一斑が窺える。「主人は平気で細君の尻の所へ頬杖を突き、細君は平気で主人の顔の先へ莊嚴なる尻を据ゑた」、「御両人は結婚後一ヶ年も立たぬ間に礼儀作法杯と窮屈な境遇を脱却せられた超然的夫婦である」(153頁)、と猫が評する。苦沙弥の細君に対する家父長的で権威的な振る舞いは、少なくとも猫の目に映ることはない。1905年の時点では、日本は親が結婚相手を決めることが主流であった。家父長制の下で、家庭における男性優位も保証されていた。しかし、寒月の親代わりとも言える苦沙弥は結婚における本人同士の意思を尊敬すべきだと思い、自分の細君に対しても威圧的な言動をとっていない。つまり、苦沙弥の実生活における結婚観、男女観は時代のジェンダー的規範に拘束されず、彼自身の良心と自然のゆくまに任せていると言える。これは苦沙弥が猫に「純然たる天然居士の再来だ」(104頁)と評される所以でもある。「鼻子」が金持ちであることを知った後も彼女に対する「尊敬の度合は前と同様である」(108頁)苦沙弥は、世俗的な利害と打算で動いているのではなく、あくまでも「天然」に動いている。

しかし、問題は苦沙弥のこの「天然」は「歡言愉色、円転滑脱」(298頁)の俗世間と相容れないものである。「頑冥不靈」(344頁)で、「智慧の発達した男ではない」(329頁)、「精神が朦朧として不得要領」(370頁)、「心は天保銭の如く穴があいて居る」(370頁)、と苦沙弥が猫に酷評される。この猫の語り(／騙り)に流されて、例えば大町桂月のように、苦沙弥を、ひいては作者漱石を「未だ稚気を免かれず」と断じてしまうのは早計である。世俗的な処世術に疎い苦沙弥こそ大智愚かの如しという哲理をそのまま体現している人物である。そもそも、猫の古今東西縦横無尽の知識の源と言えは苦沙弥にはほかならない。苦沙弥の脳内の知の宇宙は、彼の膝の上、背中に乗っている猫の「読心術」(406頁)で吸い取られていたからだ。「吾輩」を「知識巨匠」(215頁)にたらしめたのはほかでもなく「苦沙弥先生」であった。

4.2. 「大和魂」批判

十年前から付き合い合ってきた友人迷亭が、「地味に世帯向きに出来上がった」、「腹の中は毒のない善人」(94頁)だと苦沙弥の「偏屈」を弁護する。さらに苦沙弥の文章が「行雲流水の如し」(96頁)と褒め称えられていることを細君に伝え、苦沙弥が本を買いすぎていることを理解させようと努める。猫を拾い、弟子を愛しているところを見ると、彼が善人であることは間違いない。猫の博識も苦沙弥のおかげだから、苦沙弥は碩学である。しかも、「偏屈」な彼の世間に対する見方も普通の世俗的な人間社会を超越している。これを端的に物語っている言動は彼の「大和魂」批判であろう。「大和魂！と新聞屋が云ふ。大和魂！と掏摸が云ふ」(262頁)、「東郷大将が大和魂を有つて居る。肴屋の銀さんも大和魂を有つて居

る。詐欺師、山師、人殺しも大和魂を有つて居る」(263頁)、「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示す如く魂である。魂であるから常にふらふらして居る」(263頁)と。

「大和魂」という言葉は1890年代から新聞や雑誌などで言及されるようになり、「他国民と一線を画する日本人独特」の「国民の精神性」として「鑄直され」¹³⁾、「戦闘状況」で「維持される優美で廉潔で剛毅な心性」を指し示すようになった¹⁴⁾。日露戦争が開戦したときから『東京朝日新聞』の多くの戦死者関連の報道に「大和魂」という見出しが目立ち始める¹⁵⁾。例えば、1904年5月28日の「大和魂」という記事で、「戦場の余談」を紹介し、「忠肝義膽死を見る事歸するが如き我兵士」、「日本武士の大和魂」などの言葉が記されている。この「大和魂」は主に国家の為に戦場で戦い、戦死も顧みない勇敢な「国民精神」を指していると思われる。従って、「大和魂」は日本民族特有の誇るべき民族精神として、他国との戦争に国民を奮い立たせる国民統合の精神的中枢を担う高さまで持ち上げられた。しかし、このようなナショナリズムの観点から見ると畏敬すべき存在である「大和魂」の威厳を、「偏屈」な苦沙弥は軽々と地に落とす。彼にとって、「大和魂」を騒いでいる新聞は掏摸と同格で、日露戦争で軍功を挙げた東郷大将も肴屋や詐欺師、山師、人殺しと同じ心性を持ち、「大和魂」の中味も「三角」か「四角」か、定かではない。「三角」という言葉は、金田のような「実業家」が金儲けのために信奉する「義理をかく、人情をかく、恥をかく」「三角術」(161-162頁)を想起させる。つまり、「大和魂」という言葉が持つ畏敬すべき「国民精神」の真髄というポジティブな意味は、苦沙弥により反転されてしまっている。「国家」という共同体の利益を優先した、他国の領土を奪い合う帝国主義的な戦争のために奮い立たせられた「大和魂」は、実は個人の利欲のために詐欺や盗み、人殺しを働く犯罪者や、「金と情死をする覚悟」の金田のような実業家の不徳な「三角術」(161頁)に通じるところがある、という解釈の可能性がここでほめかされている。

もっとも、「大和魂」の語源をたどっていけば、『源氏物語』にある。「才を本としてこそ、大和魂の世に用ひらるゝ方も、強う侍らめ」¹⁶⁾は、光源氏が長男元服の際に発した言葉である。この「大和魂」(和魂)は「才」(「漢才」、「学問(漢学)上の知識」と対になっている概念であり、日本人の「実生活上の知恵・才能」¹⁷⁾を指している。

苦沙弥の「大和魂」批判は本来の「大和魂」の意味(日本人が持つ実生活における知恵、才能)を喚起している。同時に、もともとの意味から乖離した、帝国主義的対外拡張戦争に寄与する「大和魂」イデオロギーに対して、「逸民」ならではの皮肉を繰り広げている。

4.3. 「偏屈」という「隠れ蓑」

「大和魂」諷刺から見えてくる苦沙弥の政治批判は明確で辛辣である。しかし、同時代的にこの作品が糾弾された痕跡はなかった。同じ時期に、与謝野晶子が日露戦争に出征した弟の身を案じて書いた「君死にたまふことなかれ」は、大町桂月に「世を害する」思想だと指弾された¹⁸⁾。一方、漱石は「未だ稚氣免れず」と評されるだけでその指弾から免れている。漱石が描き出す苦沙弥は「偏屈」だからだ。「偏屈」である故、或いは意識的無意識的に「偏屈」の身振りをしている彼は、近代国民国家の「国民」でありながらその「国民精神」

に抗う〈自由〉を獲得している。

前述したように、中国伝統の「逸民」は教養と才智があるエリートたちである。彼等は社会現実に批判的である故、政治社会から遠ざかろうとする。その特徴は強い主義主張や独特の倫理道徳観を持ち、決して現実世界の利欲に動かされないことにある。「逸民」の典型的な人物で、例えば、「竹林の七賢」の阮籍や嵇康は、それぞれの形で政治批判と権力者への抵抗を展開していた。当時、司馬氏は曹氏の魏王朝（漢王朝を篡奪して成立した王朝）を篡奪するために、儒教道徳から見ると不義不忠を働いていた。阮籍は酒浸りで役職を真面目に行うことを拒否していた。しかし、阮籍の才智が時の権力者司馬昭（211-265）に気に入られていたこともあり、阮籍は「酒を隠れ蓑にし」、「魏晋の王朝交代期において、反抗と保身の危険な綱渡りをみごとに演じ切った」¹⁹⁾。一方、阮籍のような徹底した「逸民」になれず、公然と司馬氏に刃向かった嵇康は司馬氏に不孝の罪を着せられ殺された。

苦沙弥は「酒を隠れ蓑にし」ていないが、「天然」と「偏屈」が「隠れ蓑」になり、そのもとで「大和魂」の不都合な内実に異議申し立てをしていた。

4.4. 「天稟の奇人」たち

「偏屈」な「逸民」である苦沙弥の周りに集まってくる仲間たちもそれぞれ「逸民」の風格を有している。

その中で、一番自由気ままな「逸民」の気分を味わい得ている、或いは謳歌出来る身分にいたるのは迷亭であろう。彼はもはやすべての世俗の係累から解放されている。「美学者」といわれている彼は、お金も、時間もある故、「遊んで」いられる。かつ眼鏡をかけている近視の彼は徴兵される心配もない。世帯持ちの苦沙弥よりも、世俗の利害から超然と出来る立場にいる。実際、彼は世間のしきたり、礼儀作法、利害損得から自由になっている。珍野家をまるで自分の家のように出入りし、臆せずに、「実は君あれ出鱈目だよ」（18頁）と言い、現実の結婚制度も〈脱構築〉の対象にする、「心配、遠慮、気兼ね、苦勞、を生れる時どこかへ振り落した」「偶然童子」（91頁）である。

このような迷亭が、小学校時代の友人が日露戦争で死傷していることを知らされて、「何だか世の中が味気なくなつて人間もつまらないと云ふ気が起こつた」と思いきや、「暮、戦死、老衰、無常迅速杯と云ふ奴が頭の中をぐるぐる駆け廻り、「好い具合に撓る」松の枝に、「首がかゝつてふわふわする所を想像して見ると嬉しくて堪らん」（70頁）と言う。この一見荒唐無稽な首縊り願望の裏に迷亭の厭世的な一面のほか、死を意識しすぎていたからこそ、死の衝動に駆られていたことも垣間見える。例えば、「竹林の七賢」より少し後の時代を生きた顧榮（?-311）は横暴な司馬冏（西晋の皇族、?-302）に仕えていたとき、「災難が身に及ぶことを恐れ、終日酩酊し、役所を統轄しなかった」という²⁰⁾。その時に彼は友人に「常に禍が身に及ぶのを恐れ、刀や縄を見るたびに自殺したいとまで思っていました」と語っている²¹⁾。酒に酩酊していた顧榮と、酒を飲んでいなくてもまるで酩酊したような迷亭は、死を恐れる余り自殺願望に駆られるという点では共鳴しあっていたと言える。

一方、迷亭と「同日同刻位」に「似た様な経験」（71頁）をしていたという寒月も、秘かな死の恐怖を感じていなかったとは言いがたい。当時の官立学校の学生の徴兵免除年齢が

28歳だったから²²⁾、「泥棒陰士」と同じ「年は二十六七歳」（192頁）と思われる寒月は、大学院の理学士という身分であったゆえ、徴兵免除ギリギリの年齢であった。実際、日露戦場では志願兵の学士が戦死している報道もあったので、「苦味ばしつた好男子」（193頁）という立派な容姿と身体を持つ寒月が徴兵検査を受けたら、甲種合格する可能性が大きい。同世帯の青年たちが戦場で大量死していた時機に、寒月は言い表せない不安に駆られていたと思われる。川の底から自分を呼ぶ女性の声を幻聴して水に〈飛び込む〉行為は、日露戦争の戦場で若い兵士たちが絶体絶命の状態ですべてに飛び込む行為を彷彿とさせる。少なからずの読者に似たような恐怖と精神的な刺激をもたらしたと思われる。いずれにせよ、迷亭と寒月の「不思議な体験」は、日露戦争の緊迫状態とどこか連動していると言える。もっとも、「大和魂」を体現する戦死をここまで茶化してしまう「逸民」たちの破天荒な言動が指弾されずに済んでいるのは、やはり彼らがそれぞれ「天稟の奇人」（353頁）という「隠れ蓑」をまとっていたからではないか。

しかし忘れてはいけないのは、「常規を以て律すべからざる、普通の人間以外の心理作用を有するかと怪まるゝ風来坊」（180頁）である迷亭は実は才気溢れる大学者であることである。「臥龍窟」でもっとも弁舌を振っていたのは迷亭である。出鱈目を言って人を担ぐのも、人一倍の博識だから出来る凄技である。細君が「よく色々な事を知って入らっしゃるのね、感心ね」と言うと、「え、大概の事は知つて居ますよ。知らないのは自分の馬鹿な事位なものです。しかし夫も薄々は知つてます」（254頁）と臆せずに茶化す。しかし、彼にははっきりとした「逸民」的なスタンスがある。それは利欲に動じないことである。

これは、「学問最高の府を第一位に卒業」（178頁）した「活動図書館」（179頁）と言われている寒月にも通じている。彼は結局、「活動切手」（178頁）だと（迷亭に）言われた金田令嬢と結婚していない。利欲損得に動じない価値観は、苦沙弥をはじめ、迷亭や寒月、さらに、無為自然を主張する独仙や俳劇者の東風など、「臥龍窟」に集う「逸民」たちの共通スタンスである。

5. 「吾輩」は「逸民」である

5.1. 非凡な「吾輩」

『吾輩は猫である』では猫の見聞きしたこと、感じ取ったことが語られている。重要な登場人物である「吾輩」は、普通の猫はもとより、普通の人間をも凌駕する知力を持っている非凡な猫である。世渡り上手な上に、「読心術」という特異な超能力を生まれつき持っている故、猫の世界だけではなく、人間世界の観察者、批評者である視点を獲得し、さまざまな「真理」を感得していく。『吾輩は猫である』は猫の非凡さが日に日にまし、〈碩学〉に「進化」（87頁）していく物語でもある。

「吾輩」は捨て猫であった。苦沙弥に拾われて珍野家の家猫になった。かつて野良猫だったという出自もあってか、本能的に世渡り上手である。猫界では、周囲の猫に対して対応を工夫してうまく関係を維持している。例えば、横暴な車屋の黒とも「知己」になり、「彼の気焰を感心した様に咽喉をころころ鳴らして謹聴し」、相手を煽って「御茶を濁す」（15頁）

手際を見せる。また、かわいい三毛子の前では、「理詰の虚言を吐かねばならぬ事がある」(43頁)とも割り切っている。一方、人間が「強力を頼んで」猫界に与える「不人情」や「掠奪」(8頁)に対して、「猫の時節を待つがよからう」と「楽天」(8頁)的である。

「吾輩」は、お雑煮に引っかかって踊るなどの猫らしい失敗もする。珍野家の人間にも猫らしくあしらわれる。しかし、「読心術」という特殊能力のおかげか、彼は段々と〈碩学〉へと「進化」していく。いつ心得たかが誤魔化されているこの「読心術」とは、「人間の膝の上へ乗つて眠つてゐるうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣をそつと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電気が起つて彼の腹の中の行きさつが手にとる様に吾輩の心眼に映ずる」(406頁)、という神妙なものである。「幸にして苦沙弥先生門下の猫児となつて朝夕虎皮の前に侍るので先生は無論の事迷亭、寒月乃至東風杯と云ふ広い東京にさへ余り例のない一騎当千の豪傑連の挙止動作を寝ながら拝見する」「光栄」(255頁)に「吾輩」が恵まれている。苦沙弥と迷亭という碩学の脳内情報が自然と「吾輩」の頭の中へと流れ込む。その上に、気鋭の俊才寒月や東風が加えた「駄弁」も聴講できる。従つて、猫の精神世界は古今東西、縦横無尽の知識で構成されていく。さらに、「吾輩」が優れているのは、これらの知識を活用して、独自の批評判断、乃至「真理」まで織り出すことが出来ることである。

5.2. 「進化」する「吾輩」

「吾輩」は、「臥龍窟」に集まってくる「逸民」たちの脳内情報を「読心術」で読み取ったり、その弁舌を見聞きしたりすることで自己の脳内情報の拡充を図っていた。従つて、彼の精神世界も猫という外見とかけ離れたものへと日々「進化」していく。どうやら苦沙弥も「吾輩の普通一般の猫でない」と云ふ事を知つて居る」(86頁)らしい。だから、猫の本分だと思われている鼠取りを怠つても「吾輩」は放逐されることはない。そして、「人間に知己が出来」、「己が猫である事は漸く忘却して」来て、人間と「雌雄を決しやう」どころか、「人間同等の気位で彼等の思想、言行を評隲したくなる」(87頁)境地にたどり着く。実際、猫は作品全篇を通して、人間を、特に「逸民」たちについて「評隲」をしている。例えば、「鼻子」が隣近所も動員して珍野家や寒月を「探偵」していることについて、卒業したての理学士寒月は「能がなさ過ぎる」とか、苦沙弥は「無頓着で且つ余りに銭がなさ過ぎる」とか、迷亭は「偶然童子だから、寒月に援けを与へる便宜は尠からう」(123頁)と「評隲」する。この時点で、「吾輩」は猫として進化の極度に達して居るのみならず、脳力の発達に於ては敢て中学の三年生に劣らざる積りである」(124頁) そうだ。

これに止まらず、「吾輩」の「進化」はさらに加速していく。彼は人間的な「正義」、「人道」、「義務」(124頁)まで会得してくる。彼は自身を「世間一般の痴猫、愚猫」と差異化した上で、金田家を「偵察」するのは「公平を好み中庸を愛する天意を現実にする天晴な美拳だ」(123頁)という。また、烟草が人間の嗜好品であるように、「金田邸は吾輩の烟草である」(140頁)と自己弁護する。続いて、寒月と酷似している「泥棒陰士」が登場するくだりでは、「全智全能」の神が時には「無智無能」である「パラドックス」論を「道破した者は天地開闢以来吾輩のみであらう」(189頁)と嘯く。

ところが、鼠をとらない「吾輩」は書生の多々良三平に食われる危険性に直面すると、足

が腐るまで坐禅して「廓然無聖」の理屈を考える達磨や静坐の工夫をする儒家のような「知識巨匠」は「脳中の活力は人一倍熾に燃えて居る」(215頁)と言って、自分を暗に「知識巨匠」にたとえ、鼠をとらないことを弁解する。それでも、「吾輩は頭を以て活動すべき天命を受けて此娑婆に出現した程の古今来の猫」(216頁)である故、大事な身体を保全するために鼠取りを敢行しようと決心する。「吾輩」はもはや「知識巨匠」を気取り始める。「猫の一年は人間の十年」(266頁)とはいえ、「一歳何ヶ月に足らぬ」(267頁)猫にしては異例の「進化」としか言い様がない。結局「吾輩」は鼠取りの能力がないことが証明されるが、「世を憂ひ時を憤る」(267頁)高度な人間的、社会的精神性を持っていることがますますアピールされるようになる。

このように、「吾輩」が次々と「真理」を感得し、博識を駆使して持論を長々と開陳している場面は多々ある。例えば、お雑煮の「餅の魔と戦つて居る」(38頁)時にも、「危きに臨めば平常なし能はざる所のものを為し能ふ。之を天祐といふ」という具合に、次々と「真理に逢着」(38-39頁)する非凡さを示している。また、「洗湯」を覗いて古今東西の博識を駆使して服装論から裸体論まで展開した上で、「西洋人は強いから無理でも馬鹿気て居ても真似なければ遣り切れないのだらう。長いものには捲かれろ、強いものには折れろ、重いものには圧されろと、さうれろ尽くしでは気が利かんではないか」(287頁)、と西洋的な弱肉強食の論理に追従する風潮に対する批判まで開陳する。さらに、「自然は真空を忌む如く、人間は平等を嫌ふと云ふ事だ」(289頁)と、人間の競争を好む本質を鋭く突き、人間社会全体を看破したような「真理」を導き出す。

さらに、「吾輩」は読者に対しても自己の非凡さをアピールすることに余念がない。「凡て吾輩のかく事は、口から出任せのいゝ加減と思ふ読者もあるかも知れないが決してそんな軽率な猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、其一字一句が層々連続すると首尾相応じ前後相照らして、瑣談織話と思つてうっかりと読んで居たものが忽然豹変して容易ならざる法語となるんだから」(340頁)と、自分の語りをしっかり吟味することを促す。宿無しの子猫が、たまたま「逸民」である苦沙弥に拾われ、「逸民」たちの薰陶のもとで人間的な精神世界を獲得したばかりではなく、遂に、人間社会を超越した智を感得したと、「吾輩」は自己評価しているのだ。

5.3. 「吾輩」の「逸民」的傾向

前述したように、「読心術」に長け、常日頃「逸民」談義の薰陶を受けている「吾輩」の精神世界を構成しているのは、「逸民」である苦沙弥をはじめとした、迷亭や寒月、東風、独仙たちの思想そのものである。従って、猫である「吾輩」の精神世界は彼等の博識で構成されると同時に、彼等の「逸民」色に染まっていき、「逸民」的な傾向を帯びてくるのは自然の成り行きである。いわば、「逸民」たちが感知しない所で、「吾輩」は「逸民」思想の薰陶を受けていたとも言える。従って、猫の身体を持ちながら、精神がすでに「逸民」的傾向を示している。実際、「吾輩」は苦沙弥をはじめとした「逸民」たちに対して、独自の思考判断で「評隲」する特権を持ちながら、いつの間にか「逸民」全体の声の代弁者と化していく傾向が現れる。「吾輩」は一匹の猫でありながら、「我々」の意味を持つ「吾輩」で自称す

るのも妥当なようである。「吾輩」が〈碩学〉に「進化」していく過程は同時に「逸民」に〈進化〉していく過程でもあるのだ。

「吾輩」は非凡な頭脳を駆使して、とりわけ、身近で観察してきた苦沙弥に対して、かなり辛口批評をしてきた。「牡蠣」的だとか、「偏屈」で「頑固」(298頁)だとか、「精神病の徴候」(364頁)があるとか、「狂人と常人の差別さへなし得ぬ位の凡倉である」(406頁)等々、容赦ない〈毒舌〉を振るっている。これは、苦沙弥がさらに忌憚のない「駄弁」を振るうために便宜を図っているともいえる。

一方で、「吾輩」の「逸民」たちに対する擁護も見逃せない。例えば、前述したように、苦沙弥や迷亭、寒月らの「娑婆気」、「慾気」を指摘した上で、彼等に「俗骨共」の「文切り形の厭味」がないことを認めている。俗世間から見れば、彼等の「逸民」談議は全く無意味な「駄弁」にしか見えない。しかし、猫はまさにそこが「逸民」たちの「取り得」だとし、「逸民」擁護の姿勢を打ち出している。また、三毛子の死の元凶にされた「吾輩」は、「何だか世間が慵うく感ぜらるゝ。主人に劣らぬ程の無性猫となつた」(85頁)という。まるで書齋に閉じこもっている苦沙弥の心情が移ったようである。そして、世俗的な財力を奢る「鼻子」と「逸民」たちのやり取りの一部始終を傍観した「吾輩」は、猫故に「諸先生と三寸の舌頭に相互の思想を交換する技倆はない」ことを残念がりながら、金田邸を「偵察」しようと「大決烈心」(124頁)を起こす。それを「正義の為」、「人道の為」(124頁)だと位置づけている。「吾輩」はもはやすっかり「逸民」に同調している。寒月が金田令嬢との結婚を断念すべきだという迷亭らの意見にも「にゃーにゃー」(138頁)と賛成の声をあげる。もっとも、鼠を捕るといふ猫としての〈社会的役割〉を果たさない「吾輩」は、社会に「無用」な「逸民」だと言える。この「吾輩」が、一見社会に無用な「知識巨匠」を「無用な長物とか穀潰し」と「誹謗」するのは「不具なる視覚」の「凡眼」(215頁)だと主張する。多々良三平に食われると脅され仕方なく鼠取りに挑むものの失敗し、「戦争が名誉だと云ふ感じが消えて悪くいと云ふ念丈残る」(223頁)ことになる。これも明らかに当時の「国民意識」と背馳するものである。

結局、「吾輩」の「逸民」傾向が強くなっていく一方である。彼は、「娘の教育に関して絶対的放任主義を執る」(425頁)「働きのない」苦沙弥が「上等な人間」(426頁)だという。なぜなら、「今の世の働きのあると云ふ人を拜見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張つて人をおどかす事と、鎌をかけて人を陥れる事より外に何も知らない様だ」(425頁)。こんな「働き手」は「国家の恥辱」であり、国家の衰えを招くから、苦沙弥のような「逸民」の、(世俗的にみると)「意気地のない所」、「無能な所」、「猪口才でない所」が「上等」(426頁)だと論破する。さすが「臥龍窟」で「逸民」たちの精神の真髓を吸収し、その「駄弁」を傍聴してきた甲斐があって、明確な「逸民」擁護論が開陳されている。

世俗的な「働き」は往々にして利己的な打算の前提で行われることが多いので、他人に害を及ぼすことが多く、国家という共同体の利益も損なうことになる。だから、「働きのない」ことが他人と国家に及ぼす害がかえって少なくて済む、というのが「吾輩」の論理だと思われる。そこに人間世界と宇宙との調和への観照と消極的な社会批判が込められている。猫は

「逸民」が「無用な長物」だと「誹謗」されることを拒否し、「逸民」こそが「上等」だと主張する。これは、「吾輩」がすでに「逸民」の精神的な真髄を感得する境地にまで「進化」したことを示している。

6. 真の「太平」へ

「艶書」騒ぎで「文明中学」を退学させられることを心配する学生に対して内面の冷淡を隠さない苦沙弥のことを、「吾輩」は「正直」な「善人」(463-464頁)だと判断する。この「善人」である苦沙弥が、「今の人はどうしてたら己れの利になるか、損になるかと寝ても醒めても考へつづけだから勢探偵泥棒と同じく自覚心が強くならざるを得ない。二六時中キョトキョト、コソコソして墓に入る迄一刻の安心も得ないのは今の人の心だ。文明の呪詛だ。馬鹿馬鹿しい」(532頁)という。彼は独特な自殺論を開陳する。

「死ぬ事は苦しい、然し死ぬ事が出来なければ猶苦しい。神経衰弱の国民には生きて居る事が死よりも甚しき苦痛である。従つて死を苦にする。死ぬのが厭だから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よからうと心配するのである」(537頁)。

「神経衰弱の国民」の典型である苦沙弥は生きていることでさえ「余り好いては居らん」(210頁)ようだ。個人も国家も利欲損得を追求する近代「文明」のもとで、「正直」な「善人」の生きる空間は狭まるばかりである。例え精神的にこのような「文明」社会を逸脱して「逸民」として生きようとしても、生きている身体が現実の中に取り残されてしまう。死んで身体が寂滅しない限り、「逸民」は精神と身体が引き裂かれた状態におかれ、「太平」が得られない。だから、「生きて居る事が死ぬよりも甚しき苦痛である」。

苦沙弥の自殺論をはじめ、独仙の無為自然論、迷亭の独身論等々を傍聴し終えた「吾輩」の精神世界がまた一段と「進化」したようである。「呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟つた様でも独仙君の足は矢張り地面の外は踏まぬ。気楽かも知れないが迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君は球磨りをやめてとうとう御国から奥さんを連れて来た」(563頁)と。「吾輩」は「逸民」たちの超越し得ない身体の問題を悟っている。そして、「主人は早晚胃病で死ぬ」、「死ぬのが万物の定業で、生きてるてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬ丈が賢いのかも知れない。諸先生の説に従へば人間の運命は自殺に帰するさうだ」、「何だか気がくさくさして来た」(564頁)と。「吾輩」は完全に「逸民」に感化され、否、「逸民」以上に現世を超脱する思考に到達したように見える。

結局、「吾輩」はビールを飲んで死ぬ。「竹林の七賢」をはじめ、陶淵明、李白など、中国の歴史上の多くの「逸民」たちが酒に生き、酒に死んでいたことを考えると、この死に方もいかにも「逸民」らしい。水甕に沈んで藻掻いていたときも、彼の精神は働いていた。苦しいのは、「上がれないのは知れ切つて」いながら、「甕から上へあがりた」(567頁)からだ。そして、藻掻くことをあきらめた途端に感じたのは「楽」である。それは、「日月を

切り落とし、天地を粉塵して不可思議の太平に入る」(568頁)境地である。「吾輩」は死ぬことで究極の「太平の逸民」になる。こうして、「吾輩」は自身の「逸民」としての精神と猫としての身体の引き裂かれたアポリアを乗り越えるのである。

註

- 1) 古閑章「登場人物名称考―『吾輩は猫である』の場合―」、浅野洋・太田登編『漱石作品論集成』【第1巻】吾輩は猫である、桜楓社、1991年3月、171-174頁。
- 2) 前掲古閑章「登場人物名称考―『吾輩は猫である』の場合―」、174頁。
- 3) 清水孝純『笑いのユートピア：『吾輩は猫である』の世界』、翰林書房、2002年10月、45頁。
- 4) 五井信「『太平の逸民』の白露戦争」、小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第14号、特集『吾輩は猫である』、翰林書房、2001年10月、80頁。
- 5) 『後漢書』は、中国後漢朝について書かれた全百二十巻からなる紀伝体の歴史書。二十四史の一つである。成立は5世紀南北朝時代の南朝宋(420-479)の時代で、列伝の編者は范曄(398-445)である。「逸民列伝」は第83巻にあたる。
- 6) 小尾郊一『中国の隠遁思想：陶淵明の心の軌跡』、中央公論社、1988年12月、18-27頁。
- 7) 前掲小尾郊一『中国の隠遁思想：陶淵明の心の軌跡』、35頁。
- 8) 井波律子『中国の隠者』、株式会社文藝春秋、2001年3月、8頁。
- 9) 前掲井波律子『中国の隠者』、18-20頁。
- 10) 中国3世紀の魏晉時代に老荘思想を尊び、礼教を軽視し、世俗に背を向けた嵇康、阮籍、山濤、向秀、刘伶、王戎及び阮咸の七人がよく竹林に遊んでいたことから「竹林の七賢」と呼ばれている。
- 11) 『吾輩は猫である』の本文引用は『漱石全集』第1巻(岩波書店、1993年11月)による。
- 12) 『太陽』、第11巻、第16号、1905年12月、159-160頁。
- 13) 森正人『展示される大和魂：〈国民精神〉の系譜』、新曜社、2017年3月、28-33頁。
- 14) 前掲森正人『展示される大和魂：〈国民精神〉の系譜』、32頁。
- 15) 例えば、『東京朝日新聞』では、1904年5月28日に「大和魂」の社説があり、1904年5月29日、6月3日、26日に「大和魂」の見出しで戦死者を紹介している。
- 16) 山岸徳平校注『源氏物語』第2巻、岩波文庫、1965年10月、283頁。
- 17) 新村出編『広辞苑』第四版、1991年11月、2589頁。
- 18) 大町桂月は『太陽』に載せた「雑評録」で、与謝野晶子が『明星』に載せた「君死にたまふこと勿れ」を「戦争を非とするもの」とし、「家が大事也、妻が大事也、国は亡びてもよし、商人は戦ふべき義務なしと言ふは、餘りに大膽すぎる言葉也」と糾弾している(『太陽』、第10巻、第13号、1904年10月、157頁)。
- 19) 前掲井波律子『中国の隠者』、40頁。
- 20) 王瑤著、石川忠久・松岡栄志訳『中国の文人：『竹林の七賢』とその時代』、大修館書店、1991年11月、186頁。
- 21) 前掲王瑤著、石川忠久・松岡栄志訳『中国の文人：『竹林の七賢』とその時代』、186頁。
- 22) 1889年の改正徴兵令第二十一条に、(官立)「学校ニ在校ノ者ハ本人ノ願ニ由リ満二十六歳迄徴集ヲ猶予ス其事故満二十六歳迄ニ止ミ又ハ二十六歳ヲ過クルモ仍ホ止マサル者ハ抽選ノ法ニ依ラスシテ之ヲ徴集ス但第十一条ニ依リ一年志願兵ヲ志願スル者ハ此限ニ在ラス」とある(菊池邦作『徴兵回避の研究』、立風書房、1978年1月、193、194頁)。満26歳以下官立学校の在校生には一年間の志願兵制度が適用され、徴兵免除が適用された。この猶予年齢が1893年から1919

年の間に満 28 歳以下となっている（大江志乃夫『徴兵制』、岩波新書、1981 年 1 月、85 頁）。従って、年が 26、7 歳で、大学院で勉強中の理学士である寒月にこの徴兵猶予が当てはまると思われる。